

完全でドジなメイド、
十六夜咲夜

水羊羹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バレなければ問題ない。

目次

- 1 完全でドジなメイド、十六夜咲夜

完全でドジなメイド、十六夜咲夜

紅魔館の住人である十六夜咲夜は、完全で瀟洒なメイドとして有名だ。容姿端麗、家事万能、天然可憐と様々な美辞麗句を冠する彼女。

しかし、咲夜には誰にも知られていない本性があつた――



「ふう……」

咲夜が淹れた紅茶を口に運んだレミリアは、思わず感嘆の息を漏らす。

既に慣れきつた味であつたが、やはりいつ飲んでも非常に美味だ。

瀟洒なメイドに恥じない、結構なお手前である。

「本日のお茶請けはこちらになります」

「ありがとう」

すつと音もなく出されたクツキーに、レミリアは笑みを浮かべて手に取る。

焼き加減は完璧で、仄かな香りが嗅覚を刺激して止まない。

それも当然だ。咲夜の手にかかれば、どのような料理も魔法のように美味しくしてしまう。

レミリアを始めとした紅魔館の住人はもちろん、霊夢や魔理沙等も咲夜に胃袋を掴まれている。

「どうなされましたか、お嬢様？」

「なんでもないわ」

小首を傾げた咲夜にそう返しながら、傲慢の従者に鼻高々になるレミリア。

やはり、彼女は我が満月を支えるのに相応しい、十六夜だ。

あの時の対応は英断だったと自画自賛し、それも当然だと己の慧眼を讃える。

と、思考が脱線しすぎた。

せっかくのお菓子が冷めてしまうので、この辺で咲夜のクッキーを食べようか。

そう判断したレミリアは、手に持ったクッキーを口に運ぶ。

「……………あら？」

レミリアの吸血鬼として機敏な味覚が、違和感を訴えかけてきた。

舌を通じて感じるのは砂糖特有の甘さではなく、しょっぱい――



瞬間、レミリアは硬直した……いや、レミリアだけではない。

彼女の側で飛んでいたメイド妖精も、テーブルの上に置かれていた蠟燭の炎も、盗み食いしようと思配を殺していた美鈴も。

全ての存在が——咲夜を除く全てが、石像のように停止していた。

「……」

もちろん、これは咲夜の仕業で、自身の能力を使って時を止めたのである。

無表情のまま、咲夜はキョロキョロと辺りを見回していく。

当然誰も動いてなく、改めて咲夜しか存在感がない。

そして、十二分に注意を払い、安全を確認し終わった咲夜は——

「味見忘れてたわ!」

——目を回しながら頭を抱えた。

普段の瀟洒な仮面はどこにもなく、そこにいるのはかりちゅまガードをしている少女。

そう、ここにいる十六夜咲夜は——非常にポンコツなメイドだったのだ。

彼女はレミリア達が浮かべているであろう完璧とは程遠い存在で、メイド妖精とどっこいどっこのミスを連発しているのである。

料理で定番の砂糖と塩の間違いは当然、他にも掃除や洗濯でも失敗をしてしまう。本来ならば、直ぐにレミリアにバレてもおかしくはなかった。

しかし、咲夜には時間停止能力があり、結果として時を止めて失敗をフォローし、解除した後で何食わぬ顔で佇むメイドができあがり。

残念な部分について有能なのは、悲しい事であったが。

「あわわわどうしましよう」

一頻り取り乱した後、立ち上がった咲夜。

とりあえず、このクッキーは処分……はもつたないので、自分で食べて新しい物を用意しなければ。

「うう……しよっぱい」

涙目になりながらクッキーを食べ、レミリアが持っているのもうんしよんしよと四苦八苦して取り、それも口に含む。

間接キスになって頬を赤らめたのは置いておき、さて代わりのクッキーを作るぞと気合い注入。

「へっ……」

意気込んだのはいいのだが、一步進むと足を踏み外して転んでしまう。

戦闘では冷徹な思考ができるのに、家事関連だとドジっ子になる咲夜であった。

赤くなつた鼻を擦りながら、急いで扉へ向かう。

「ぐすつ………いたい！」

扉にも頭をぶつけ、赤いおでこのまま咲夜は厨房に行くのだった。



——塩味かと思つたが、いつも通り美味しいクッキーだ。

若干の腑に落ちなさに首を傾げながら、何気なく咲夜の方に目を向ける。

いつも通りの瀟洒なメイドのまま、どうしてかレミリアは不満に思つてしまう。

「咲夜」

「はい」

「お前は、なんだ？」

「私は、お嬢様の忠実な下僕でございます」

やはり、気のせいであつたか。

咲夜の返答はいつも通り、時間を置かない即答だ。

まるで、時を止めて一頻り悩んだ後、満足のいく答えを言っているかのよう。

「ならいいわ」

どこにも不満がないのだから、考えるだけ意味のない事だ。

頷いて気持ちを切り替えたレミリアは、咲夜の頬に小さな冷や汗が垂れるのを見つめる。

はて、どうしたのだろうか。

咲夜が緊張するような問答はしていないつもりだが……いや、これは怯えているのか？

何故、と問うまでもなく、察しがついた。つまり、咲夜はレミリアに捨てられないかと戦々恐々していたのだろう。

突然自分の存在意義を尋ねられれば、そうなっても無理はない。

「安心しなさい。貴女は永遠に私のモノよ」

微笑みかけたレミリアを見て、珍しく言葉に詰まる咲夜。

だが、直ぐに恭しく頭を垂れると、無言でレミリアを敬う。

やはり、自分の考えは正しかった。これで、咲夜もわかってくれただろう。

「ふ、ふっ」

可愛いところもあるのね、とレミリアは咲夜の新たな側面に上機嫌になりつつ、盗み食いをしようとした美鈴をお仕置きするのだった。



主従の気持ちは、決して交わらない。

有能なメイドにご満悦なレミアアと、ドジっ子だとバレルのが怖い咲夜。

二人のすれ違いは、それこそ永遠に続くのだろう。

これは、ポンコツメイド咲夜による、レミアアに失望されぬよう頑張る奮闘記である。